

『テアイテス』における思考の対話的性格について

郷家 祐海

序

思考が魂の内的対話であるという考えは、後期プラトン対話篇において度々登場する¹。この後期対話篇で度々登場する考えが最初に明示されるのは、『テアイテス』においてである。『テアイテス』第二部でプラトンは、虚偽判断²がいかにして成り立つかを問題として取り扱う。虚偽判断が成り立つことを説明するために、そこでは五つの説明モデルが提案される。思考が魂の内的対話であるという考えは、このうち第三のモデル、いわゆる「取り違え(ἀλλοδοξία)」モデルのなかで登場する。

『テアイテス』第二部の虚偽判断に関する議論で従来の研究がとりわけ試みてきたのは、虚偽判断の説明が失敗に終わるという結末を生みだす原因を探ることである。この原因是必ずしも対話篇の議論のなかで明示的になっているものとは限らない。従来の解釈の多くが試みてきたのは、プラトンあるいはテアイテスが暗黙のうちに定めている前提のうちに、虚偽判断の説明が失敗した原因を探ることである。従来の研究はこの失敗の原因を探ることに関心を寄せてきたあまり、思考が魂の内的対話であるという考え方という、後期対話篇において度々登場する重要なモチーフが対話篇の議論のなかで果たす役割についてほとんど関心を寄せてこなかった。

本稿が試みるのは、思考が魂の内的対話であるという考えが、『テアイテス』第二部における虚偽判断の問題に取り組む中で重要な役割を果たしていることを示すことである。第一節では、第三の提案「取り違え」モデルと思考についての前述の規定が登場する文脈を簡単に整理する。第二節では、「取り違え」モデルと思考についての前述の規定が、第一節で確認した問題を回避しうるものであることを確認し、そのうえで第三モデルが新たに直面する困難を分析する。次に第3節では、第四と第五のモデルが第三モデルで提示された思考の規定を発展させる形で提案されていることを示す。その結果として、虚偽判断に関する議論を通じてプラトンは魂の活動としての思考についての反省を、思考の主体たるわれわれに促していることを明らかにする。

1. 虚偽判断に関する基本的な問題

思考が魂の内的対話であるという考えが登場するのは、虚偽判断を説明する第三の提案、

¹ Cf. Soph.263e-264a, Ti. 37b, Philb. 38c-4

² 本稿では δόξα の誤語として「判断」という語を用いる。

「取り違え」モデルが提案されるときである。この第三の提案は、第一の提案と第二の提案が直面した困難を回避する形で提案されている。本節では、この第一の提案と第二の提案について簡単に整理し、この二つの提案がそれぞれ直面する困難を確認する。

1-1 第一モデル

虚偽判断を説明する第一の提案は、虚偽判断を「知らない対象について判断すること」として考えるというものである。この第一の提案に基づいて進められる議論には解釈上の問題が多く指摘されている³。他方でその基本的な構造は明快であり、その構造についての理解は諸研究のあいだでほとんど一致している。この基本的な構造は以下のように整理できる。

- (1) a は対象 X を知っているか、知らないかのいずれかである [前提 I；排中律]
- (2) もし a が X を判断している($=X$ についての判断をもつ)ならば、 a は X を知っているか、知らないかのいずれかである。 $((1)$ より)
- (3) 同一の対象 X について、知りかつ知らないことは不可能である [前提 II；無矛盾律]
- (4) もし X が Y ではなく、かつ a が X を Y だと虚偽に判断するならば、以下のいずれかの場合になる。 $((2),(3)$ より)
 - (i) a は X を知っており、かつ Y を知っている。
 - (ii) a は X を知らず、かつ Y を知らない。
 - (iii) a は X を知っており、かつ Y を知らない。
 - (iv) a は X を知らず、かつ Y を知っている。
- (5) (i)-(iv)のいずれの場合においても(3)に抵触するため、 a が X を Y だと虚偽に判断することは不可能である。
- (6) ゆえに、虚偽判断は成立しない。

この一連の議論についての詳しい分析を行うことは本稿ではできない。ここで確認しておきたいのは、上記の議論で立てられているふたつの前提 (1)および(3) が、ここでは妥当だとみなされていることである。ソクラテスは前提 I と前提 II のどちらについても、少なくとも明示的には問題視していない。

上記の一連の議論がアポリアとして成立しているためには、知と判断についてのふたつの原理が暗黙のうちに立てられている必要がある：

³ e.g. G. Fine, 'False Belief in the *Theaetetus*', *Plato on Knowledge and Forms: Selected Essays* (Oxford, 2003), 213–224; N. Stein, 'The Puzzle of False Judgement in the *Theaetetus*', *Phronesis* 61, no. 3 (2016), 260–283; 今井知正, 「偽と不知(一)」, 『東京大学教養学部人文科学科紀要』 93 (1990), 139–169.

- (K₁) XとYを知っていることは、XをYだと判断するための必要条件
- (K₂) XとYを知っていることは、XをYだと虚偽判断を行わないための十分条件

このふたつの原理がともに機能しているかぎり、対象 X を知っていても知らないても虚偽判断を行うことはできない。X を知らないならば X について判断することはできず(K₁)、X を知っているならば X についての判断はすべて真だからである(K₂)。従来の研究は、このうちどちらが正しくどちらが間違っているのかということに注目してきた⁴。(K₁)だけを保持するならば、X について知っていても X について虚偽判断を行うことは可能である。他方(J₂)だけを保持するならば、X について知らなくても X について判断を行うことが可能である。結論から言えば、プラトンの最終的な解決案は(K₁)における「知っている」と(K₂)における「知っている」の意味を区別することである。この点については後に扱う。

1-2 第二モデル

ソクラテスが第二に提案するのは、虚偽判断を「ないものを判断すること」として考えるというものである。この提案が失敗する直接的な理由は、きわめて簡潔に言えば、「ないものを判断する」ことが不可能であるということである。「ないものを判断する」ことが不可能であることは、Burnyeat が“a scandalous analogy”と呼ぶような問題含みの論証から導き出されている。この論証では、プラトンは判断作用を感覚や名指しと類比的に扱う。このために、「ないものを判断する」ことは「何も判断していない」ことと同一とみなされることになる。しかし、後の『ソフィスト』篇でプラトンが正しく分析するように、判断と言表は感覚や名指しとは異なり主語—述語という分節構造をもつため、「ないもの」について判断することは不可能ではない。

『テアイテトス』においてプラトンがこの議論の問題に気付いていたかどうかは定かではない。いずれにせよ、この問題が適切に処理されるのは『ソフィスト』篇を待たなければならず、『テアイテトス』においては「ないもの」について判断できないという結論は保持される。

第一モデルと第二モデルの検討を通じて、プラトンは虚偽判断について説明するうえで前提とすべき事項を明らかにしている：

- (I) a は対象 X を知っているか、知らないかのいずれかである（排中律）
- (II) 同一の対象 X について、知りかつ知らないことは不可能である（無矛盾律）

⁴ K₁ が正しく K₂ が間違っていると解釈する立場として、Ackrill や McDowell, Fine らが挙げられる。K₂ が正しく K₁ が間違っていると解釈する立場として、Burnyeat がいる。

⁵ M.F. Burnyeat, *The Theaetetus of Plato*, 1990, p.78.

(III) 「ないもの」について判断できない。

続く第三モデルは、この三つの事項に抵触しないような提案を行っている。このことを次節で確認する。

2. 「取り違え」モデルと魂の内的対話としての思考

第三モデルは虚偽判断を「思考における($\tau\hat{\eta}\ \delta\iota\alpha\nu\iota\alpha$)あるものどものうちの一方(X)と他方(Y)の取り違え($\dot{\alpha}\lambda\lambda\delta\alpha\xi\iota\alpha$)」として説明する。この第三モデルは、先に確認した第一・第二モデルとは一線を画したモデルである。というのも、第一・第二モデルにおいてソクラテスは判断の対象を切り分けることによって虚偽判断の説明が試みていたのに対し、第三モデルでは判断主体の思考過程の誤りに虚偽判断の原因を求めているからである。

さらにこの「取り違え」モデルは、第一・第二モデルが直面した困難を回避するモデルとなっている。取り違えられる項 X と Y はともに「あるものども($\tau\hat{\omega}\nu\ \ddot{\delta}\nu\tau\omega\nu$)」に属しているがゆえに、(III)「ないものについて判断できない」という困難を回避している。また、「思考」という、知と不知の二分法とは異なる認識形態を持ち込むことで、(I)と(II)の困難を回避している⁶。そしてこの思考をソクラテスは、次のように規定する：

Tl: 189e6-190a7

So. 考察している事柄について、魂それ自体が自身に対して詳述する言論($\lambda\circ\gamma\oslash$)〔とぼくは呼んでいる〕。
(...) というのも、魂が思考しているとき、それは対話すること($\delta\iota\alpha\lambda\acute{e}\gamma\epsilon\sigma\theta\alpha\iota$)以外のなにものでもない
とぼくのこころには浮かんでいるからだ。魂が自分自身に問いつつ答え、そして肯定し否定するとき。
また魂が、より慎重にせよ急激にせよ向かって行って決定し、そのことをすでに主張して躊躇わない
とき、われわれはそれをその魂の判断($\delta\alpha\xi\alpha$)と定める。それゆえ判断すること($\delta\alpha\xi\acute{a}\zeta\epsilon\nu$)を語ること($\lambda\acute{e}\gamma\epsilon\nu$)、判断($\delta\alpha\xi\alpha$)を語られた言表($\lambda\circ\gamma\oslash$)とわたしは呼ぼう。ただしそれは、他人にたいして音声を伴
って〔語られるのではなく〕、沈黙を伴って魂自身に対して〔語られる言論〕である。

思考は、魂が自分自身と問答を交わすことである。そしてその思考のなかである結論に達してそれを自分自身に対して主張するとき、その結論が判断と呼ばれる。つまり何かについて判断することは、ここではある問い合わせ（「考察している事柄」）に対して答えを与えることとして描かれている。この規定により、思考と判断の関係は次のようになる：

(Tl) X と Y について思考することは、X を Y だと判断するための必要条件

⁶ 「取り違え」モデルはしばしば第一モデルと同じ困難に陥ると解釈されてきた。しかし第三モデルの議論では「知る」という語は登場しない。それゆえ、第一モデルと「取り違え」モデルが困難に直面する形式は類似しているが、その困難の内実は異なる。Cf. 中畠(1985), Burnyeat(1990).

第一モデルでは、対象についての知っていることがその対象について判断するための必要条件であったのに対し、第三モデルにおいては対象についての思考をその対象について判断するための必要条件となっている。

その一方でソクラテスによるこの思考の規定は、虚偽判断が成立することを説明するどころか、その説明の失敗の原因にもなっている：

T2: 190c5-

So. したがって自分自身に対して語ることが判断することであるならば、両方 [X,Y] の対象を語り、すなわち判断し、魂において両方 [X,Y] にふれる(ἐφαπτόμενος ἀμφοῖν τῇ ψυχῇ)ひとは誰も、あるもの(X)を異なるもの(Y)であると語ること、すなわち判断することもないだろう。

ここで「魂においてふれる」とは思考することの言い換えにあたると考えられる⁷。「美は醜い」や「不正は正しい」や「奇数は偶数」などと誰も判断しないように、X を X として語り、Y を Y として語るかぎり、だれも X を Y だとは判断しない。このソクラテスの議論には、次のような暗黙の前提が含まれている：

(T2) X と Y について思考することは、X を Y だと虚偽判断しないための十分条件

この(T1)と(T2)がともに機能しているかぎり、虚偽判断を行うことはできない。したがって、第三モデルは虚偽判断を説明できない。

なぜ(T2)が妥当だと言えるのか。ソクラテスが(T2)の事例として持ち出すのは「美は醜い」、「不正は正しい」、「奇数は偶数である」、「馬は牛である」などといった、偽であることが自明な判断である⁸。しかしこれらの事例のみからは、(T2)のような一般化は導かれない。偽であることが自明ではない判断も存在するからである。じっさい対話篇中に登場する「テアイテオスは醜い」や「知識は真なる判断である」といった判断について、その真偽は自明ではないからこそ、ソクラテスとテアイテオスはその真偽について問い合わせている。ところが

⁷ この「ふれる」という表現への言い換えを可能にするのがテアイテオスの第二定義に由来すると考え、プラトンが最終的に斥けるべき暗黙の前提があると考える解釈もある(Cf. Chappell. Barton)。しかし魂がなんらかの対象について認知的作用を働かせるさいに「触れる」という比喩を用いるのはテアイテオス由来ではないし、特殊な言い回しでもない(e. g. 186d4, e4-5)。

⁸ これらのうち「美は醜い(*τό καλὸν αἰσχρόν ἐστιν*)」「不正は正しい(*τὸ ἄδικον δίκαιον*)」は主-述構造が見られる。それゆえ、『テアイテオス』の虚偽判断の議論では記述は問題とされておらず同一性判断のみ問題になっているという解釈はここではとらない。Cf. H.H. Benson, 'Why Is There a Discussion of False Belief in the Theaetetus?', *Journal of the History of Philosophy* 30, no. 2 (1992), 171–199, D. Sedley, *The Midwife of Platonism: Text and Subtext in Plato's Theaetetus*, 2004.

ソクラテスもテアイテトスも、先に挙げた偽であることが自明な判断の事例から(T₂)の一般化へ移行することに対して、少なくともこの段階では問題視していない。

従来の研究の多くは第三モデルの議論に対し、判断の文脈における指示の透明／不透明の区別を持ち出してきた⁹。これによれば、判断者 a が本当は美しいものを美しいものとして認めずにそれを醜いと判断することはできるが、美しいものを美しいものとして認めたうえでそれを醜いと判断することはありえない。(T₂)はこの後者について定式化しているというのが、従来の解釈である。この解釈によれば、思考や判断を「自分自身に対して語ること」と規定することのポイントは、判断や信念の文脈において指示を不透明にすることだということになる。

このような解釈にしたがえば、虚偽判断のパズルを解く手掛かりは、判断の文脈における指示の透明／不透明を区別すること、あるいはフレゲに倣って意義と意味を区別することに求められるかもしれない。しかし Burnyeat らが示しているように、『テアイテトス』におけるプラトンの虚偽判断のパズルに対するアプローチは、現代の言語哲学や意味論的研究の成果を援用するアプローチとは異なる¹⁰。第三モデルに続く第四、第五モデルにおいてプラトンが採用するアプローチは、魂の思考の形態をよりつぶさに考察するというものである。

第三モデルが批判されるポイントは、次の点である。すなわち、X を X として思考するならば、X を Y と取り違えるはずがない。これは逆に言えば、X を Y と取り違えることができる思考というものがどのようなものかを明らかにすることが、虚偽判断を説明するうえで求められる。X を Y と取り違えることができる思考とは、X を X として思考せずに X について思考するような思考である。そして X についての思考が X について考察し問うという過程を伴うかぎり、X を X として思考せずに X について思考するような思考とは、X について問うことが有意味であるような思考である。X について問うということが有意味なものとならないかぎり、思考を問い合わせが交わされる対話とするプラトンの描写は意味をもたない。次節では、第四・第五モデルの議論の検討を通じて、思考において問うことが可能な思考の形態をプラトンが模索していることを示す。

3. 魂の内的対話としての思考の発展

第四・第五モデルは、第三モデルを部分的に修正したものである。というのも、虚偽判断を X と Y の取り違えだとする考え方そのものは保持されているからである¹¹。第四。第五モ

⁹ Cf. C.J.F. Williams, ‘Referential Opacity and False Belief in the Theaetetus’, *The Philosophical Quarterly* 22, no. 89 (1972), 289–302; J. McDowell, *Plato: Teaeetus*, 1973.

¹⁰ Cf. Burnyeat, *The Theaetus of Plato*, 84–123, 田坂さつき, 『「テアイテトス」研究：対象認知における「ことば」と「思いなし」の構造』, 2007, 172–173.

¹¹ Cf. 193c6, 194a4–5, 195a5, 196c4–5, 199a4–b6.厳密に言えば実際に登場する語は $\alpha\lambda\lambda\omega\delta\omega\xi\alpha$ ではなくその類義語であるが、大方の解釈が一致する通りその意味は変わらない。

モデルが修正するのは、虚偽判断の捉え方ではなく、魂とその思考の形態の捉え方である。問ないとそれに対する答えを魂の思考と判断の基本的形式とする第三モデルを踏襲しつつも、虚偽判断を説明できる思考と判断の形態をソクラテスは提示する。

3-1 第四モデル

第四モデルは、魂を蜜蟻の塊(έκμαγεῖον)と見立てたうえで、その蜜蟻に刻まれる印(σημεῖα)すなわち記憶像の再認(ἀναγνώρισις)を判断として説明する。このモデルにおいて虚偽判断は、感覚された対象に対してあてはめるべき記憶知¹²をあてはめるべきではない記憶知との取り違えによって説明される。このモデルにおいて、可能とされる虚偽判断は3通りある。テアイテスとテオドロスの両方を記憶し知っているひとを想定すると、以下のように整理できる。

- (i) テアイテスとテオドロスを見て、テオドロスをテアイテス、テアイテスをテオドロスだとそれぞれ逆に判断する (192cd, 193bd, 193e-194a)
- (ii) テアイテスを見て、それをテオドロス(Y)だと判断する (192c, 193d, 194a)
- (iii) 遠くの知らないひとを見て、それをテアイテスだと判断する (191b, 192c)¹³

蜜蟻モデルが上記の虚偽判断の事例を可能なものとする理由は、対象についての認知の不完全性に由来する。ここで問題となる認知は感覚と記憶の二つであり、このどちらかが不完全であるときに感覚している対象について虚偽の判断を行うことが可能となる。このとき、二通りの虚偽判断の可能性が想定できる。第一は、ある対象についての判断の失敗が、その対象についての不完全な感覚に由来する場合である(193b9-194b6)。例えばひとがテオドロスについての記憶をもって知りながら、遠すぎる地点から見てそれをテアイテスだと判断する場合、そのひとはテオドロスをテアイテスと取り違え、「遠くに見えるあのひとはテアイテスだ」と虚偽の判断を行う。第二は、ある対象についての判断の失敗が、その対象についての不完全な記憶に由来する場合である(194c5-195a9)。蜜蟻になぞらえられる魂の質は各人によって差があり、対象についての不完全な記憶しか保持できない場合は対象の再認に失敗する。この場合には、たとえテオドロスを適切な地点から見たとしても、テオドロスについての記憶が曖昧であるために適切な判断に失敗する。このように蜜蟻モデルは、虚偽判断が生じる要因を感覚や記憶の不完全性のなかに見出そうとしている¹⁴。

¹² このモデルにおいては、ある対象をたんに記憶していることはその対象を知っていることのうちに数えられている。ただしソクラテスが自覚するように、虚偽判断の議論を通じて知識とは何かという問いはいったん留保されている(196d11-197a4)。

¹³ Burnyeat (1990, 97-98)が指摘するように、「遠くの知らないひととテアイテスを見て、知らない人をテアイテスと間違える」事例も、対話篇では明示されていないが可能だと思われる。

¹⁴ Burnyeat(1990, 99)はこの第二の点、すなわち記憶の不完全性を見過ごしており、虚偽判断が生じる要因

虚偽判断が生じる要因を感覚や記憶の不完全性のなかに見出そうとすることは同時に、「取り違え」という第三モデルが直面した困難を回避する思考の形態を提供している。「取り違え」モデルの段階で説明されているかぎりでは、XをXとして思考せずにXについて思考する思考を説明できなかった。しかし感覚と記憶という不完全であることが可能な認知を導入することで、対象XをXとして思考せずにXについて思考することが説明可能になる¹⁵。ある思考の主体のXについての感覚と記憶のいずれかが不完全である場合にその主体がXについて思考するとき、その主体はXをXとして思考していない。それゆえその主体は、Xとは何かを思考において自分自身に問いかけることができる。その結果としてくだされる判断は、真偽の自明な判断ではない。

しかしこの蜜蠍モデルに対して、ソクラテスは批判をくわえる。それによれば蜜蠍モデルは、感覚を伴う判断しか説明することができない(195c6-d3)。「5+7=11」などといった感覚を伴わない虚偽判断については、蜜蠍モデルは有効ではない。この問題を開拓するためにソクラテスが提案するのが、第五モデルである。

3-2 第五モデル

第五モデルは、知識を鳥、魂を鳥小屋に喻えて、その所有(*κτήσις*)と所持(*έξις*)という区別を導入する。あるひとが学習などを通じて知識を所有しているとき、そのひとはその知識を所有している。またそのひとが所有している知識を用いてなんらかの判断を行うとき、そのひとはその知識を所持している。この所有と所持の区別のポイントは、知の能力とその発揮を区別するところにある。知識を所有するひとは、その知識を時々の思考や判断のなかで用いることができるという能力(*δύναμις*)を有する。知と判断は、この能力の発揮によって説明される¹⁶。

第五モデルにおいて、虚偽判断は判断において所持すべき知と所持すべきでない別の知との取り違えとして説明される。「5+7=11」という誤った計算を例にとると、「5+7」を問うさいに用いられる答えに対して12という適切な知識の代わりに11という誤った知識を取り違えて所持する。このときこの計算をおこなうひとは、すべての数を所有し知っていても「5+7=11」と虚偽の判断を行う。

プラトンは、「5+7=11」と判断することを「12=11」と判断することと言い換えている(198)。これは奇妙な言い換えに見えるかもしれない。ひとは「5+7=11」と判断することはありても、「12=11」と判断することはありえないだろう。さらに言えば、「5+7」がいくつかを問

を第一の点、すなわち感覚にのみ求めている

¹⁵ Burnyeatは感覚と思考と各々独立した別個の認識形態と捉えている。しかし、プラトンが対比させているのは対象についての不完全な感覚あるいは記憶を用いた思考と対象についての完全な思考である。

¹⁶ プラトンによるこの区別とアリストテレス『デ・アニマ』II巻5章との関連性については、Burnyeat(1990, 107 n42)を参照。

い思考することはあるとしても、 i_2 がいくつかを問い合わせることはありないとと思われる。プラトン「 i_2 」の知と独立に「 $5+7$ 」の知を想定してはいない。それでは「 $5+7$ 」と「 i_2 」との違いはどこにあるのか。

現代的な提案として考えられるのは、「 i_2 」に対する指示の透明性と不透明性の区別を持ち出したり、「 i_2 」という語の意義(Sinn)と「 $5+7$ 」という語の意義とを区別するという方針をとることである。これは用いられる言語のもつ特性に焦点をあてた言語哲学的あるいは意味論的な提案だと言える。しかしプラトンはこのような方針をとらない。ソクラテスは、計算を行うひとについて次のように記述している。

T3: 198c4-9

So. この計算すること(*τὸ ἀριθμεῖν*)を、ある数がちょうどどれ程の大きさであるのかを考察する以外のものだとわれわれが定めることはないだろう。

Theai. おそらく。

So. それゆえ、そのひとが知っている対象を、〔そのひとは〕知らないかのように考察している(*σκοπούμενος... ὡς οὐκ εἰδώς*)ようにみえるのだ。

この箇所は、Burnyeat がその重要性を指摘する¹⁷まで多くの研究者によって見過ごされてきた。これによれば、ある数について計算するひとは、その数について知らないかのような状態にある。ここで、計算はある数についての大きさを考察するものと言われている。すでに規定されているように、この考察するということは思考において自らに問うことである。ゆえにこの計算についての記述は、他の思考についても当てはめて考えることができる。

ある対象について思考において問うひとは、その対象についての知を所有はしていても発揮していない。ある対象についての知を所有していても、時々の思考においてその対象について自らに問う場面では、その知は発揮されていない。つまり「 $5+7$ 」について問うことは i_2 について問うことではあるが、その i_2 について知らないかのように問うている。「 $5+7$ 」について問うことは i_2 について問うことではあるが、 i_2 を i_2 として思考せずに問うている。 i_2 を i_2 として思考せずに問うとき、そのひとは i_2 を知っているにもかかわらずその知を行使していない。

この知の発揮されない思考は、第四モデルで示された思考の形態と両立する。ある対象についての感覚または記憶が不完全であるとき、その対象について問うことが可能となる。このときその対象について記憶として知っていたとしても、その知はその思考においては発揮されていない。第五モデルでは、感覚や記憶とは別の領域の知についてもその知の伴わない思考のあり方を示している。第三モデルの段階では、Xについて思考することは、XをXとして思考することでしかなかった。しかし知を伴わない思考形態の導入によって、XをX

¹⁷ Cf. Burnyeat(1990, 112-113).

として思考せずに X について思考することが可能になる。これによって、X について問うことが有意味なものになる。思考において問うことが可能となる条件を探るなかで、プラトンは魂が自分自身と行う対話としての思考の様々な形態を整理している。

ある対象について問うことが可能であるとき、そのひとはその対象について知っていてもその思考においてはその知を行使していない。そのその問い合わせて答える段階でその対象についての知を行使するとき、そのひとは問い合わせに適切に答えることができる。つまりこのとき、そのひとは真なる判断をくだしている。他方で答える段階でもその対象についての知を行使できないとき、そのひとは問い合わせに適切に答えることができない。つまりこのとき、そのひとは虚偽の判断をくだしている。ここでは判断の真偽は、判断の主体が能力として備えている知を行使できるかどうかに依拠している。

この鳥小屋モデルに対してソクラテスが指摘する問題は、ここで能力として主体に備わっている知が、虚偽判断、すなわち不知($\alpha\gamma\nu\omega\alpha$)の原因にもなりうるというものである(199d1-5)。「 $5+7=11$ 」という判断においては、「 11 」が知として行使されている。しかし「 $5+7=11$ 」という判断は偽であるのだから、ここで「 11 」という知の行使は虚偽判断を招いているというのである。ソクラテスによれば問題はそれだけではなく、知が虚偽判断すなわち不知の原因となるならば、不知が真なる判断すなわち知の原因となることも容認しなければならなくなるという(d5-8)。田坂が適切に指摘するように、この「不知」とはたんに知の対義語として処理することはできない¹⁸。不知の所有ということはこのモデルでは想定されていないからである。

この問題は、「知識は真なる判断である」というテアイテスの定義に対して疑いを投げかける理由を与える。このテアイテスの定義では、知識と真なる判断という 2 項の関係について説明できているようにみえても、不知と偽なる判断を加えた 4 項の関係についてはうまく説明できないからである。とはいえて知識を真なる判断とみなすテアイテスは、この段階にきても自身の定義に欠陥があるとはまだ考えていない。鳥小屋モデルに対してソクラテスが指摘する問題に対し、テアイテスは知の鳥に加えて不知の鳥を鳥小屋のなかに入れようとする(199e1-6)。

この提案に対するソクラテスの批判について詳しく検討することは本稿ではできない。少なくとも考えられるのは、不知の鳥にまつわる議論が思考に対するその思考主体自身のかかわり方を問題にしているということである。プラトンはたんに虚偽判断のパズルを解こうとしているのではなく、このパズルに取り組むことを通じてわれわれの魂とそれが行う思考についての反省を行っている。これは言語哲学や意味論の道具立てを援用する現代的なアプローチと異なるばかりでなく、ロゴスの分析を中心として虚偽判断のパズルに取り組む『ソフィスト』篇のアプローチとも異なる。魂とその思考についての反省を通じて虚偽判断に取り組むというアプローチを『テアイテス』においてプラトンが採用するのは、

¹⁸ Cf. 田坂(2007, 173-174)。

この虚偽判断のパズルが「知識は真なる判断である」というテアイテオスの定義を検討するという文脈のなかで行われていることと無関係ではない。「知識は真なる判断である」というテアイテオスの定義は、「あるものどもについて魂自身がそれ自体で(καθ' αὐτήν)関わる」ことを「判断すること(δοξάζειν)」と呼ぶ規定に端を発している。『テアイテオス』の知識の探求は、魂の能力や活動についても問題にしている。虚偽判断のパズルに対し、現代からみれば遠回りとも思えるような議論をプラトンが行っているのは、知と知の主体としての魂についても同時に問題としているからである。

結論

本稿では、『テアイテオス』第二部において登場した魂の内的対話としての思考という考え方がどのような文脈のもと登場し、どのように展開されていったかを考察した。思考が魂の内的対話であるという基本的な考え方をプラトンは保持しつつも、虚偽判断にまつわる問題に取り組む形で、魂の思考の様々な形態を分析していた。本稿ではさらに、このような魂の思考についての分析を通じて虚偽判断にまつわる問題に取り組むというのアプローチが、知識とのその主体たる魂について問うという『テアイテオス』の主題に影響されているということを提案した。しかし本稿では、鳥小屋モデルに対してテアイテオスが提案した「不知の鳥」に関する議論や、「知識は真なる判断である」という定義を直接論駁する箇所については検討することができなかった。この点を課題とし、本稿を締めくくりたい。